

ドナウ の 四季

2009年・秋季号・No.4

わたしの海外暮らし	天野 真理子	1
何といてもゴルフ	分田 宗広	2
自転車inハンガリー	江淵 泰久	3
がんばれスーパーのおばちゃん	小野 久禎	4
洞窟コンサート	小松 裕文	5
音楽と私	大泉 エリ子	6
コバケンさん	香川 真澄	
コバケン-理代子のトークディナーショウ	坂井 圭子	7
モツレク	吉川 亜矢子	
コバケン-理代子のコラボレーション	盛田 常夫	8
エコノミストのハンガリー回想(2)	佐藤 経明	10
収穫の喜び	小松 裕文	11
ハンガリー履歴書	板井 一政	12
留学生自己紹介 菊地 玲子・古曾志	飛鳥・犀川 裕紀	13
緑の丘日本語補習学校	島田 麻子	14
ブダペスト日本人学校		
澤田 千浩・江森 雅美・小林 律子・西村 智美		15
運動サークル情報		16
二種類の申込書	梶原 将司	
日本人学校運動会	橋本 直樹・久世 優美子	17



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928 年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフヒストリー。

「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】
◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込）◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ [著] 盛田常夫 [編訳]

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判
■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

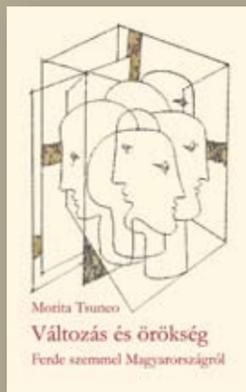
ハンガリーのポスト社会主義の現状を鋭く分析。Klub Radioや雑誌で賞賛と激論の問題作。

Változás és Örökség

Ferdeszemmel Magyarországról Morita Tsuneo

■ ブダペスト国際書籍フェア出品作品 好評発売中、2800Ft

ハンガリー人は自らの立場を誤解していないか。外国企業と外国資本に依存し、自立精神を失ったハンガリー人は、「借物経済」の中で、お客さんのように「ゲストワーカー」になっていないか。政治家はGDPの5割を手中にし、市場経済を「国庫化」する「国庫資本主義」の道を行っていないか。政権政党のみならず、野党が陥る便宜主義とポピュリズム。借物経済、ゲストワーカー、国庫資本主義のキーワードで解明するハンガリー社会分析。大反響を呼んだ「国庫資本主義」論を中心にハンガリー社会の病根を抉る。キリギリスから蟻にならなければ、ハンガリーの浮揚はない。



わたしの海外暮らし

天野 真理子

こでも遅く生きていってくれることだろう。

ハンガリーから帰国後に編入した公立小学校では、3年生だった娘が社会の授業中、アメリカンスクールで教えられた身の回りの発見を言葉にする授業に倣い、環境に関する質問・提案をしたことがあったが、後の個人面談で環境問題を取り上げるのは3年生では早すぎると指摘されたことを思い出す。日本の枠の中に収めようとする教育と自由発想を推奨するアメリカの教育の差を感じた。

イギリスの大学では国費交換留学システムでイギリス人でないわが子のみならず、選ばれた生徒にイギリス人以外が多かったのを見て、イギリスの「人を育てる」という方針、懐の広さに感銘を受けたこともあった。

わが子の成長過程を振り返り、一人ひとりの子に即した教育と得た知識を生かせる体験、そしてそれが理解され促される環境の大切さを痛感している。

そしてわたしは、正直言ってハンガリー時代は異文化との新鮮な出会いと子育てに無我夢中、帰国して過ごした4年間は目の前のやるべきと思われたことを懸命にこなし馬車馬のような日々、けれどその後渡ったイギリスでは、子供から少し手が離れ、これまでの自分を振り返る余裕が持てるようになっていた。そうすると、日本の生活や価値観に疑問が湧いてきた。日本の生活には義務と錯覚したり勘違いしたりする事柄に満ちていて、時間に追いつたられる強迫観念に迫られていたのではないかと考えるようになった。ちょうどそんな時、関西の福知山線で脱線事故が起きた。時間優先社会のストレスで精神を病んだ運転手が、強迫観念に迫られて起こした事故だ。これをきっかけに、私の中で「何事もこうあらねばならぬ」という日本における価値観に疑問符がついた。

イギリスではロンドン郊外の緑豊かな環境で8年間暮らしたが、時間があれば草原で草食む牛や羊に会いにドライブに出かけ、新緑の頃には緑のトンネルロードンでは狭い道でも二階建てバスが通れる

エッセイ

よう木々の枝を落とし、それがおとぎの世界へのトンネルのように見える一をくぐりながら未知の国への誘いを楽しんだ。そんな住環境が私の日常に馴染んだ頃、少しずつことばでは表現できない大気の心地よさ、それに癒される自分を感じるようになり自然に精神世界に足を踏み入れていった。友とともに瞑想の師について自分の内面を探り、ちょうどその頃出合ったヨガを続けるうち自分の中に平安な空間を見出すに至った。

その後主人の駐在に伴いここギリシャに移り住んだが、アテネ市内の喧騒から離れた海岸近くの住環境は、毎日変わる空の色、海の色に気付かせてくれ、太陽のありがたさに感じ入る日々だ。以前と同様に、テニス、スキー、ダイビングにと身体を動かすことの大好きな私のライフスタイルに変わりはない。しかし前と違うのは、固定した観念から解き放たれ、何をすることも自分を機軸として発想する自由さが芽生え、すべてに新鮮な喜びが感じられるようになったこと。また、子供が巣立ち夫と二人の生活となって新たな発見も多々ある。ここにいて「夫は妻の欠落した部分を教える最良の師である」という友の言葉に倣い、良い関係が築けるよう試行錯誤している。

最近、ハンガリー人の物理学者、哲学者であり音楽家でもあり、各界の識者の集うブダペストクラブも主宰しているアーヴィン・ラースロー氏の本、『創造する真空』、『マイクロシフト』と出会った。証明されるもののみが認められてきた科学分野の人が、哲学や宗教という目に見えない精神面と科学を結びつけ、今、最大の危機を迎えているこの地球に警鐘を鳴らし、今こそ人間同士の繋がり、人間と自然との繋がりに目を向けるべく個人の意識を高めて、統一された世界作りを模索しようと呼びかけている。今は、この氏の提言に関心があり、個人に何ができるかを日本の空より高く大きくと娘の言うギリシャの空を見上げながら思考する毎日である。

何といてもゴルフ

分田 宗広

早朝の1番ホールでのティー・ショットは誰にとっても緊張するもので、これが運悪く最初の順番となると嫌なものです。上手くまっすぐ飛んでくれればいいのですが、右や左にそれらラフの中に消えてしまうのはまだしも、ひどいものになるとクラブのヘッドがボールの上を叩いて30ヤードくらい地面を転がっておしまいという場合もあります。そんな場合は、それまでグッド・ショットと声援を送っていた仲間たちも急にシーンとしまうから余計に惨めです。

これまで色々なスポーツをやってきましたが、年を取った今、面白いのは何といてもゴルフ。ゴルフの唯一の欠点は面白すぎることで

テニスや野球と違って、対する相手が静かに止まっているボールというのがくせものです。一打と次の一打の間に、考えたり思いをふくらませる時間があるからです。私などは、ボールを目の前にすると、前回のプレーで150ヤード手前からグリーンに吸い込まれた偶然の一打が鮮明に蘇ってきて、腕も肩もカチカチになってしまうのです。練習は大事ですが、冷静さや落ち着きを保つのも大事です。バーディーを取った後は嬉しすぎて、ダブル・ボギーを続けて叩くものですし、後続のプレーヤーが打ち込んできて腹を立てたらダフやトップをするものです。

相手が止まっているボールだけに、言い訳の余地が無く、自己嫌悪に陥るのもひとしおです。私もこの自己嫌悪に襲われて、もうゴルフクラブは見たくないと、何度ゴルフを辞めたことか。実は、ハンガリーに来る前の年の夏に軽井沢でひどく惨めな思いをして、10ヶ月間クラブを握りませんでした。それでも懲りずにまた練習を再開してコンペに参加するようになったのですから、好きなんですね。何度ふられても懲りずに美女に言い寄る、もてない男の心境ですかねえ。

またゴルフのように、人間の品性、性格が現れるスポーツは他にはありません。

ニューヨークタイムスの記者が書いた「大統領とゴルフ」という本は、9人のアメリカ大統領について、そのゴルフに対する態度と性格について語っています。

ビル・クリントンは熱狂的なゴルフ・ファンで、8年間の任期中に400回以上もゴルフをしたそうです。彼は、ルール通りにプレーしていれば100前後のスコアの悩めるゴルファーの一人であったようですが、負けず嫌いな性格なのか自分の頭の中では80台で回るゴルファーでした。



彼の実際のプレーと頭の中のゴルファー像のギャップは、主にマリガン(打ち直し)の多用で埋められたようで、常に疑惑の多いゴルファーでした。著者は、2002年にクリントンと一緒にプレーをしています。実際は100前後叩いている筈なのに、スコア・カードは何故か82になっていて、クリントンのサインしたカードの写真も本に載っています。

モニカ・ルインスキーのスキャンダルでもみ消し工作をして、自分のミス・ショットを認めようとしなかったことは、彼のゴルフを知る人々にまさにクリントンのやりそうなことだと思わせました。それでも、明るく楽天的な性格なのか、彼のゴルフは気取りのない、楽しいものであったようで、魅力的な人柄は今でも絶大な人気があります。

一方、ジョージ・W・ブッシュは、クリントンほど熱心なプレーヤーではなかったようですが、とにかくせっかちで、早く回ることを第1の目標にしていたようです。ブッシュは家族で良くゴルフをしましたが、ブッシュ家の4人で18ホールを1時間42分で回

った記録には驚きです。彼らは、最後のティー・ショットが着地しないうちにカートを走らせていました。ブッシュは、ルールをちゃんと守るゴルファーでしたが、彼と一緒にプレーをしたベテラン・プロのクレンシヨウによると、危険を恐れずにいつでもグリーンを攻める攻撃的で突進するゴルフであったといえます。イラク侵攻もドライバーの一振りと変わらない気持ちなんですね。

ところで、ゴルフは、18世紀半ばにスコットランドはエジンバラのゴルフクラブで、一応のルールが出来てスポーツとして確立したと、夏坂健の本に書いてありました。

ゴルフという言葉が最初に文献に現れるのは、15世紀のスコットランド王国。民衆が余りにもサッカーとゴルフに打ち興じていて、イングランドとの戦いに備えての槍や弓矢の練習を怠っていたので、「今後一切サッカーとゴルフはまかりならん」と王様ジョージII世がお触れを出したのが、ゴルフという言葉が残る最古のものというのですから、なんとも皮肉な話です。

皮肉やユーモアと言えばゴルフにまつわるジョークというのが山ほどあって、他のスポーツにこんなにあるのかしらと思わせます。Golf is the perfect thing to do on Sundays because you always end up having to pray a lot. /Never take lessons from your father. Never teach golf to your wife. Never play with your son for money. /A ball you can see in the rough 50 yards ahead is always not yours.

家では奥方に庭の草むしりを頼まれても生返事ばかりをしている世の亭主も、ゴルフとなると朝6時からいそいそと出かけに行く。そんなゴルフの楽しさとは、きれいにセッティングされたコースの中で、各自が理想のスコアを胸に、思い思いに自分の飛球線を頭に描くことではないでしょうか。しかしそこには幾つもの落とし穴が。。。



自転車inハンガリー

江淵泰久

ハンガリーに来て4度目の夏を迎える。近頃、サイクリストの姿をよく目にする。一昨年よりも昨年、昨年よりも今年とその数は増えている気がする。楽しそうに自転車に乗っている人を見るだけで自分もウキウキしてくる。最近、これまで眠っていた自転車熱がムクムクと体の中で起き始めたことを感じている。

実は、自転車熱がぶり返しそうな理由がもう1つがある。この原稿が印刷される頃には明らかになっているだろうが、世界最大の自転車レース、ツール・ド・フランスに久々に日本人選手が出られる可能性が出てきたのだ。これまでは13年前に1人、おまけの様に出たきりだった。2009年が、野茂の大リーグデビュー、或いは中嶋悟のF1ドライバーデビューの年の様になりそう。自分に限らず日本全体で自転車がブレイクする予感がある。

ハンガリーに来た時、正直言うとそれまで聞いていた「自転車王国・ヨーロッパ」という看板と実態のギャップに少々驚いた。ヨーロッパは自転車と自転車競技が盛んだと聞いていた。ツール・ド・フランスは、サッカーのワールドカップと同じ位盛り上がっていて、大会開催期間中は誰もが仕事の手を止めてレースの進行に見入らるのか」とか「この2つの街は実はこんなに近いのか」などと新しい道を通る毎に発見があった。

東京駅の近くにある会社へも片道5kmの道のりを雨の日以外はこれで通っていた。会社に自転車という自分用の「足」があることは非常に便利である。仕事が遅くなくても終電車を気にする必要がない。昼休み、その日の気分で旨いものを食べたくなると、銀座や神田辺りまでぶらりと出歩ける。往復を含めても昼休みの1時間があれば十分だ。春や秋には、墨田川にサンドウィッチを持参して川べりでのんびり過ごすことも何度か。季節ごとに風景の移り変わりを発見するのはささやかな楽しみだった。

最近ハンガリー人の気質が少しずつわかってきた。自転車に限らず他にも通ることだが、彼らはスポーツをする場合、行

ロードバイクの選手は200~250kmのレースを4~5時間で走破する。ヨーロッパの美しい都ブダペストとウィーンの250kmの道のりを、ロードバイクに乗って1日かけて走り切る、という赴任直前にたてたドリームプランも、「こちらのドライバー、特に1号線を走る人たちは運転が乱暴だからとにかくやめとけ」というハンガリー人の忠告で早々に泡の様に消し飛んでしまった。

日本にいる頃から、自転車が好きだった。オフロードのマウンテンバイクではなく、タイヤの細い軽量のロードサイクル。このタイプは舗装された道を長距離走するのに適している。ハンガリー赴任前に住んでいた東京では、重い荷物がない時は、山手線内なら日常の移動にも活用していた。電車や地下鉄の都合で遠回りする必要も乗り換える手間もない。出発地から目的地までほぼ直線距離で行かれる。「その分疲れるじゃないか」と人からは言われるが、満員電車の人いきれや、まずい乗り継ぎでイライラ待つことを考えれば、自分の足で距離を稼ぎ、体を包む風を感じながら外を走る方がよっぽど清々しくて気持ちいい。

街と街の距離や、その高低差を体で感じられることも魅力だ。「ここは案外高台にあるのか」とか「この2つの街は実はこんなに近いのか」などと新しい道を通る毎に発見があった。

東京駅の近くにある会社へも片道5kmの道のりを雨の日以外はこれで通っていた。会社に自転車という自分用の「足」があることは非常に便利である。仕事が遅くなくても終電車を気にする必要がない。昼休み、その日の気分で旨いものを食べたくなると、銀座や神田辺りまでぶらりと出歩ける。往復を含めても昼休みの1時間があれば十分だ。春や秋には、墨田川にサンドウィッチを持参して川べりでのんびり過ごすことも何度か。季節ごとに風景の移り変わりを発見するのはささやかな楽しみだった。

いろいろな道を通り、それまで出発地と目的地がそれぞれ点でのみ認識されていたのが、道中も体で感じることによって線になる。そしてそれらが積み重なることで、生活圏内のいくつもの街が頭の中で面としてイメージできる様に繋がってきた。

最近ハンガリー人の気質が少しずつわかってきた。自転車に限らず他にも通ることだが、彼らはスポーツをする場合、行

為そのものを、自分のペースで100%楽しむ。道具の性能やブランドなどあまり拘らない。格好や見た目も二の次である。激しく自分を追い込む様な練習をする人の割合が日本よりも低い様に感じる。まずスタイルやフォームから入り、目標を立て、それを達成するプロセスにも楽しみを見出す日本人と対比的である。自転車屋の数の少なさが、必ずしもポピュラー度合いと一致しないということに気がついた。目標に縛られず、「天気がいいからみんなでスポーツしよう」という、子供の頃以来忘れていた姿勢を彼らに思い出させられた。

最近、気持ちよくのびのびと走られるコースを見つけた。ブダペストから郊外まで50km以上ほとんど信号や大型車両に邪魔されない道がある。プスタを貫く車のない並木道、いかにもハンガリーらしいクリーム色の一軒屋。その景色を自分の足で走り抜けると、まるでその豪華な景色は主人公の自分のためにある様な気になる。ハンガリーは美しい国だと改めて思う。それを五感で味わうことができる「自転車」という乗り物もこの国によくマッチする。見直してみると、ブダペストを少し離れさえすれば日本以上に快適なルートがいくつもありそうだった。

競技志向のサイクリストは最近の日本の方がやや多いかもしれない。ただ、家族でサイクリングしている数は圧倒的にハンガリーの方が多い。お父さんが、自分の自転車に補助輪付きの幼児車を連結し、牽引しながら走るという、日本では見かけない光景もこちらではよく目にする。

最近、プロロードレース自体ヨーロッパ全体で人気は下降傾向と聞いた。日本で聞いた「王国」の話もどうやらだいぶバイアスがかかっていた様だ。そんな中であって、わがハンガリーで形に拘らず自転車ファンが増えているのならば、それは大変喜ばしいことである。

最近家族全員の自転車を買い揃えた。倉庫の巨大なオブジェと化していた我が愛車へは油を注し、しっかりメンテナンスした。家族でドナウ川河畔を風に乗って走ること、その後おいしいビールを飲みながら風景談義で盛り上がること。今の自分のささやかな楽しみである。

がんばれスーパーのおばちゃん

小野 久禎

私は、ラトビア大学で日本語を教えていた。日本の大学と違いラトビア大学では入学した学生の半数以上が退学をしていた。

ある日、鬱病を患い、療養のため退学を考えている学生と彼の進路の話をした。私は彼が少しずつでも社会復帰することを将来的には考えた方がいいと思ひ、その学生に「調子がよくなってきたらスーパーかどこかで少しアルバイトをしたらどうか。その後で、将来何をするか考えても遅くないだろう。アルバイトをする中で何か目標が見つかるかもしれないし」と言った。その学生からの答えは私が予想していたものとは全く違った。「先生、スーパーの店員のような仕事は私がする仕事ではありません。それは社会の底辺の人の仕事です」。その学生と私の間で議論が始まった。彼が言った「社会の底辺の仕事」という言葉が許せなかった。それは、日本のスーパーのおばちゃんを知っているからである。

日本の大学で学んでいたとき、友人の一人が4年間同じスーパーで働いていた。彼の部署は地下の食品売り場で、彼からスーパーで働くおばちゃん達の話をよく聞いた。彼によれば、スーパーのおばちゃん達はたいへんプロ意識が強く、例えば揚げ物担当のおばちゃんは絶対に他の人に揚げ物をさせない。彼女は揚げ物にかけては誰にも引けを取らないと自負しているからだ。揚げ物担当のおばちゃんだけでなく、その他の担当のおばちゃんも自分の仕事に誇りを持ち、自分がその持ち場では一番と自負している。自分が休んだら売り場が困ると思ひ簡単には休まない。

日本のスーパーではみんな一生懸命働いている。店員はみんな笑顔である。商品の場所がわからなければ、店員はその商品が売っている売り場まで連れて行ってくれる。別のテナントで扱っている商品なら、そのテナントに内線で問い合わせてくれることさえある。レジに長い列ができていれば、今している仕事が切り上げられるものなら、その仕事を切り上げてレジにつき、客をできるだけ待たせないようにする。これら全てが日本では当たり前なことである。

ところで、ヨーロッパのスーパーの店員

は、自分で自分の地位を低くしているのではと感じる。英国で商品のトマトを投げている店員を見たが、誰も文句を言わず、見てもみぬ振りだった。「スーパーで仕事をするような人に常識は期待してはいけなし、できるだけ関わらない方がいい」という前提があるのではないだろうか。つまり、ヨーロッパでは職業にピラミッド状の階層があり、下の層の仕事に就く人には給与も低い、その人の仕事に対する期待も低いのかもしれない。スーパーの仕事は下層の仕事と見なされ、どんなに一生懸命働いても認められることがまずない。スーパーの店員達は「こんな仕事…」と思ひ一生懸命働かない。誰も一生懸命働かないから社会も「スーパーの店員」と見下してみる。このサイクルは、どんどんネガティブな方へ転がっていく。だから、前述のラトビアの学生も「最下層の仕事」と言ったのではないだろうか。

ヨーロッパでは自分の頭で考えて働く職種と自分の頭で考えることを期待されない職種という二つの大きな区別があるように感じる。それはヨーロッパの大きな問題ではないだろうか。

一方、日本は職種に関わらず目的を持って仕事に取り組むことが期待され、労働者の目的意識が高いように感じる。これは、日本のサービスが世界一と言われる一因ではないか。そのような日本人の代表として、ここではスーパーのおばちゃんについて述べた。スーパーのおばちゃんが日本だけでなく、世界にあふれば、世界のサービスのレベルは飛躍的に上がるのではないだろうか。ヨーロッパで暮らして悲しく感じるのは被雇用者が自分の給与を見て勝手に「この給与なら、この程度しか仕事をしない。」と自分の仕事に手を抜くことである。しかし、手を抜いて8時間働いても一生懸命8時間働いても8時間は8時間。何の違ひがあるのだろうか。まず、何を根拠に「この給与ならこの程度」と客観的な線を引けるのであろうか。

日本のスーパーのおばちゃんたちのように笑顔で一生懸命働けば、客に呆れられたり、悪態をつかれることも少ない。客にも見下されないだろう。また、自分の仕事に誇りを持っているので、充実した日々を送れる。ヨーロッパのスーパーの店員も日本のスーパーのおばちゃんのように働いた方が精神衛生上もいいのではないだろうか。

ところで、先ほどヨーロッパではスーパーの店員の仕事は最下層の仕事と考えられていると書いたが、日本ではどうだろう。ヨーロッパ同様、給与はよくない。ただし、「社会の最下層」と思われているだろうか。もし、ある客が「スーパーの店員は最下層の仕事」という振る舞いを店員にするとしよう。周りの人はその客に後ろ指を指すことだろう。

日本では、職種によるピラミッド構造がヨーロッパほどないように感じる。それにはいろいろな要因があるだろうが、職種を問わず自分の仕事に誇りを持ち、一生懸命働く労働者が多いからではないだろうか。しかし、ヨーロッパのスーパーの店員全員が怠惰で、日本のスーパーのおばちゃん全員が働き者と言うつもりはない。日本にも頭にくるような態度のスーパーのおばちゃんがいるだろうし、ヨーロッパにもいつも笑顔で親切な店員もいるだろう。実際、ラトビアではハム売り場にそういう店員さんがいたし、ハンガリーでも親切なロマの店員さんに会ったことがある。ヨーロッパの市場に目を移せば、気さくな店員に出くわすことも少なくない。

ただ、ヨーロッパでは、スーパーの店員が適当に働いてもそれが当たり前と思われ、日本ではそれが当たり前ではなく、批判の対象になることに大きな違いがある。批判をされるということは、それだけ大きな期待をかけられていることでもある。日本のスーパーのおばちゃんが大きな期待をかけられているのはその期待を店長が押し付けているからではない。おばちゃん達の働き振りからおばちゃん達が期待されるようになり、おばちゃん達はその期待に応えているのではないだろうか。つまり、ボトムアップのサービス向上である。これが日本のサービスは世界一と言われる要因のひとつであると考えられる。そこで、最後に一言言いたい。「がんばれ、スーパーのおばちゃん！」

ヨーロッパコンサート=洞窟コンサート

小松 裕文

ベルリンの壁崩壊、東西両ドイツ統一のきっかけになった汎ヨーロッパピクニックは1989年8月19日の出来事。それから20年、事件を風化させないようにとの願ひから、20周年の記念行事の一つとして8月19日、ヨーロッパコンサートがショプロン郊外のフェルテラーコシュの洞窟劇場で開かれると知った。このコンサートのメインのプログラム、ベートーヴェンの交響曲九番「合唱」を歌うため日本からツアーが計画されており、一行の宿泊するショプロンホテルに宿泊し、ツアーのメンバーと同一行動を取らせてもらった。

以下は同じようににわかメンバーになったハンガリー在住の日本人女性(匿名)二人から寄せられた感想の一部である。

ベルリンの壁が崩壊した1989年、私は中学生でした。そんな中学生でも歴史の時間に「ベルリンの壁崩壊」を学び、テレビで流れていた壁を壊す人々の映像が衝撃的であったことは今でも覚えています。ところが、その詳しい経緯はと聞かれると恥ずかしながらきちんと説明することができず、今回このイベントに参加するにあたって改めて勉強しなおさなければなりませんでした。

「汎ヨーロッパピクニック事件」については全く記憶になく、歴史の授業でいったい何を勉強していたのだろうと情けなくなるほどです。そんな私が、このイベントに参加して、この事件をとて身近に感じられるようになりました。

5年ごとに行われているという汎ヨーロッパピクニックの記念行事。オリンピックより貴重かもしれないのに、運良くこの時期にハンガリーにいて、たまたま参加する機会を与えられて私はとてもラッキーでした。

国境ウォーキングの会場は私たちが滞在したショプロンからバスで40分ほどのフェルテラーコシュというところにあります。現在は公園として整備され、記念のモニュメントや、実際に当時敷設されていた鉄条網の一部や監視台などが残されています。そんな歴史的な出来事があったとは

思えないほど静かな草原とその先に森が広がっていました。

私には「ベルリンの壁崩壊」は教科書中の出来事でしかありませんでした。だから、その時代東と西に分断され家族とも自由に会うことができなかつた人々の気持ちがどのようなものであったか、私には想像もつきませんでした。でも、今回そのような場所に実際行って何も無い広場に立ちながら、もし私がその時の東ドイツの人だつたらどんな気持ちだつただろうかと考えてみました。当時亡命を試みた人々の必死さやそれを支援した人々の思いが伝わって



くるようでした。それが本当に正しいかどうか知ることはできませんが、その時代その場にいなかった人が歴史的出来事に思いを寄せることで、その出来事が風化していくのを防ぐことはできるのではないのでしょうか。歴史的なものを残す必要性というのはここにあるのだと思います。そんな思いを抱きながら、1時間ほどのハイキングを楽しみました。

洞窟コンサートは19日の夜だった。各国要人が来るということで、私たちが滞在したホテルには大勢の警官、S P が配置された。このイベントの大きさを再認識した。事実、ショーヨムハンガリー大統領、メルケルドイツ首相もコンサートに出席して挨拶をした。

満席だった。要人の姿が見える。ほぼ定刻通りコンサートは始まった。素晴らしかった。特に、第九の合唱は、本当に素晴らしく、感動だった。指揮は守山俊吾さんオーケストラはジュール交響楽団、ソリスト、合唱団は日本、ドイツ、ハンガリー人で

構成され、日本からは約100人の合唱団が参加した。

第四章、バリトンの三原剛さんの歌声が始まると、会場は一層緊張に包まれた。ボキャブラリーが乏しく他に言葉が見つけれられないが、本当に素晴らしかった。何かこみ上げるものがあり、心に響いた。鳥肌がたつた。ステージに立った合唱団の方々はさっきまで気さくに話していた人たちとは思えないほど、無茶苦茶格好良く、誇らしく思えた。合唱が終わると、会場は大きな拍手に包まれた。スタンディングオベーション。ステージから下りてきたひとりずつ

に、抱きつきたいくらいだった。

興奮さめやらず、ホテルに戻り、打ち上げパーティが行われた。皆、幸せそうで、私も幸せな気分だった。このイベントの発起人である糸見偲さんのスピーチを聞くまでは、彼女は言った。

「国境公園の桜の木が切られました」。日本からの寄付で植樹された桜の木が今回の20周年を記念して造られたモニュメント設置に邪魔だった

とかで、断りもなしに切られてしまったというのだ。私は、その時その桜の木にどんな歴史があるのか知らなかつたけれど、それでも胸が痛かった。なぜ? どうしてそんなことが出来るのか。ただ、悲しい気持ちになった。会場の雰囲気は一変した。通訳として参加していた若いハンガリー人女性が言った。

「桜の木のことを聞いて、本当に驚いています。私も本当に残念です。このままではいけない。何とかしないと。」少し救われた気がした。ハンガリー人にも同じ気持ちのひとがいる。私は少し複雑な気持ちで会場、そしてショプロンを後にした。

ハンガリーに来なければこの事件、イベントを知ることは一生なかつただろう。そして考えることもなかつただろう。始まりは、単なるミーハー心からだったが、この旅行は私にとって大きなものになった。平和と、いつかあの公園で再び桜の木を見られる日が来ることを願わずにはられない。

音楽と私

大泉 エリ子

私にとって「第九」と言えば、やはり『よろこびの歌』です。小さい頃から音楽が好きで、ピアノを習っていたり、中学時代にはブラスバンドでクラリネットを吹いていたりしたこともあり、クラシック音楽は身近なものでした。「第九」の楽曲全てを聴いたのは大人になってからですが、このあまりにも有名なフレーズは、いつの間にか聴いたことのあるものになっていました。

私は、2008年4月にハンガリー・ブダペストに来ました。派遣教員としてブダペスト日本人学校へ赴任するためです。数年間の期限付きのハンガリーでの生活ですが、「音楽」が身近に感じられる場所へ赴任できたことは、とてもうれしい出来事でした。しかし、日本と同様、こちらでも当然仕事は忙しく、毎日毎日家と学校の往復です。家に帰ってからも仕事のことが頭から離れないときもあり、くつろぐ時間もそこそこです。学校では、国語や算数などの教科の指導の他に、運動会やドナウ祭などをはじめとする大小様々な行事があります。それ以外にもしなくてはならないことが数多くありますので、心身共に疲れを感じることも少なくありません。それでも、私にとって「教師」という仕事にとっても魅力を感じ

ていますし、やり甲斐も感じています。なぜなら、ストレスを感じる以上に、「よろこび」や「楽しさ」などを感じることができるからです。目標に向かって子どもたちと成し遂げたときの「達成感」、つらく苦しい時期を乗り越えて良い結果が出来たときの「充実感」、子どもたちとの何気ない会話の中からも子どもたちの成長を感じられる「驚きとうれしさ」など、数えたらきりがありません。それぞれの個性を持った子どもたちですから、子どもの数だけ感じるので。学校の1年間は毎年同じような流れでも、子どもが変われば全く違う時間を過ごすことになり。毎年どんな出来事に出会うのか、まるで冒険にでるかのように期待と不安を感じながら過ごしています。だから、教師はおもしろいのです。

こんな私の教師生活に潤いを与えてくれるものの1つに「音楽」があります。クラシックだけではなく、洋楽や邦楽など様々なジャンルの音楽に興味があります。そして、可能な限りライブを楽しむようにしています。どのジャンルでも「非日常」を味わうことができるからです。忙しくドタバタとした日常を離れて、「もの悲しい雰囲気」に浸っ

てみたり、「勇敢な騎士」になったつもりで元気になったり、「背筋をピン!」と伸ばしたくなったり・・・その空間、その音、その空気・・・会場の雰囲気でもんな私にもなれるような、そんな感覚になることができます。それが楽しくて会場に足を運んで行くのです。

今回の「第九」では、小林研一郎さんのパワフルな指揮と池田理代子さんのパワフルな歌声から「パワー」を頂きました。あのような大きな舞台上で、高らかに鳴り響く音の数々を自由に操っている姿がすばらしかったです。ソリストとして、高らかに歌い上げる姿がすばらしかったです。そして、合唱団の方々のまっすぐに飛んできた歌声がすばらしかったです。その迫力を実感することができました。ありがとうございました。



香川 真澄

小林研一郎と池田理代子のトークディナーショー

坂井 圭子

7月9日のマリオット・ホテル。広間に足を踏み入ると、そこはまさに日本。ハンガリーに居て、これほど日本を感じたのは久しぶりだったのではないのでしょうか。華やかなディナーショーに相応しい雰囲気を肌で感じることができました。

ハンガリー国立フィルのバイオリニストとチェリストの演奏が始まったこの日のディナーショーも、日本人音楽関係者の演奏や池田氏の演奏が始まると、柔らかい口調でありながら毅然としたマエストロの指導の音が響きました。発せられる一声は、まさに鶴の一声。これまで培われた音楽家としての尊い経験や豊かに育まれた音楽観から、学ぶ者へ熱く分かりやすくアドバイスをされます。こちらまでドキドキしながら見聞き入ってしまいました。この後、マエストロは幼少の頃の音楽に携わるようになったきっかけやディナーショーにも参加されていた芸大で肩を並べて学ばれた無二の朋との思い出話を語りながら、いつしか池田氏との楽しいトークへと導かれていかれました。

池田理代子氏はあの有名な「ベルサイユのバラ」の作者です。私もオスカルとアンドレの行く末をハラハラしながら読みふけたことを覚えています。一世を風靡した漫画家池田氏が東京音大に合格されたということを知ったのはいつだったでしょ

うか。私も音楽を学んでいた者ですから、そのニュースには驚くとともに随分思い切った転向だと友人と話していたことがあります。今回、小林先生との共演という舞台で初めてお目にかかることになったわけです。この日は、他のソリストや団員の方を気遣いながらテンポよくトークを運び、またマエストロの伴奏にて歌も披露されました。47歳から大学へ入学して、常にチャレンジ精神を持って頑張っていたという姿勢がひしひしと伝わってきました。一番おしゃれが気になる若き日に、髪を振り乱し、顔も洗わず必死で描き続けた「ベルバラ」が今も歌を続けさせてくれているという言葉からは、この道を選んだ自分自身をきちんと見据えて活動しているというある種の悟りのようなものも感じられました。常にマエストロへの感謝を素直に表現されていたことも印象深く残っています。

声楽家は、楽器をいつも持ち歩いている状況にあります。ある程度の年齢がこないと楽器ができません。その楽器作りも大変ですが、良い状態に維持していくことも安易なことではありません。風邪や歌いすぎ、また悪い発声をすれば声帯がすぐにこびりつきます。「たこ」ができれば休めなくてはなりません。何よりもそうならないように日々努力しなくてはなりません。ホー

ルいっぱい響く声を飛ばすには、筋トレが必要な楽器なのです。演奏会当日に向けて、楽器とそれを鳴り響かせる自分自身をベストコンディションへ引き上げていくということは、身体も精神も鍛えていくという日々の訓練に他なりません。同じ音楽を学ぶ者としては、50歳近くになって演奏会を始めるということがかなり大胆な賭けであろうことは知るところです。しかしこの日、池田氏の話聞いて、人はいつでも「なせば成る、何事も!」精神を失ってはいけいではないかと勇気付けられたような気がしました。

徐々に音楽の世界に浸った時間でした。日々、仕事や家事に追われて自分のことなど考える時間もままならない私にとって、マエストロ小林との再会、そして池田氏との出会いはとても新鮮で、自分の中の音楽への思いを熱くするとともに、「一期一会」とはまさにこのことだわとの出会いに感謝させてもらっています。

トークショーはおいしいディナーと相まって、始終にこやかに楽しく進んでいきました。最期は、メゾの鈴木さんやバリトンの浅井さんも加わって「ふるさと」の全員合唱です。おなかも満たされ、心も満たされ、リフレッシュした面持ちでホテルを後にしました。また明日からも頑張ろうと気持ちを新たにしながら・・・

吉川 亜矢子

7月にブダペストで行われた「小林研一郎さんと池田理代子さんのヨーロッパツアー」で、ベートーヴェン「第九交響曲」の合唱の伴奏者として、参加させて頂くことができました。お話を頂いたときには、「私で務まるのだろうか・・・」と思いましたが、思い切って、チャレンジしてみることにしました。「第九」はベートーヴェンの交響曲の中でも有名な曲ですし、何度も聴いたことのある曲だと思っていましたが、楽譜や歌詞、オーケストラスコアを見ると、新しい発見ばかりで、合唱との練習時も、普段、ソロや室内楽での演奏の仕方とは、まるで別の技術や感覚を要求され、まだまだやらなければいけない事が沢山あることを実感しました。

この機会を頂いたお陰で、合唱の魅力を改めて感じる事が出来ましたし、そしてなによりも、小林研一郎さんのリハーサルを間近で聴けたことや、お話を伺うことが出来たことは、私の宝物となりました。とくに、心から音楽に対する熱い想いを語られる姿や、私を含め、演奏会に携わるすべての方々に対する温かい心配りには、感銘を受けました。演奏家だけではなく、多くの方々の協力があって、演奏会はなりたっていることや、常に感謝の気持ちを忘れてはならないことを学びました。その全てが、ステージの上でひとつの音楽となり、音となって聴衆の心へ響き、そして鳴り止まない拍手となることを、コンサート本番に会場で聴きながら思いました。

今回、参加させて頂き、多くの貴重な体験をさせて頂いたことは私にとって、さらに音楽家として前に進むための大きな励みとなりました。

コバケン-理代子のコラボレーション

盛田 常夫

この7月、ブダペストとウィーンで小林研一郎と池田理代子のコラボレーションコンサートが実現した。ブダペストの芸術宮殿ではベートーベンの第九交響曲、ウィーンのリヒャルト・シュテファン大聖堂ではモーツァルトの「レクイエム」。47歳で東京音楽大学に入学し、声楽を学んだ池田は、ソリストとしてオペラや合唱曲の舞台に立っている。池田を慕って集まった合唱団を率いて、念願だったコバケンとの初の海外公演となった。

天は多物を与える

ひとつの世界で頂上を極めた人が、別の世界でも頂上を極めることは至難の技だ。世界の頂上を極めるためには、相当の才能が要求されるし、その才能が開花されるまで長い時間が必要だからである。だが、それほど才能豊かな人は、他の世界でも頂上を極めるだけの別の能力を持っていることに何の不思議もない。ハンマー投げの室伏選手がプロ野球や格闘技の世界に入っていればそれなりの選手になったことは確実だろうし、逆にイチローが別のスポーツ競技でもトップ選手になれたらと想像することも難しくない。小林研一郎が音楽家の道を歩まずに、将棋やゴルフの世界に入っても、それなりに名を残せる成績を残せたと思う。同じように、池田が劇画の世界から別の世界で活躍できる才能を披露したとしても、驚くことではない。

人の才能は多面的なものだから、ひとつの世界を極めた人でも、まったく別の世界で新たな目標を追求したいという想いが湧き出るのも自然なこと。ただ、その道を極めるためにはそれなりの修行や鍛錬が必要で、まったく異質の鍛錬を同時並行的に行うことはほとんど不可能に近い。もっとも、陸上競技の10種競技のように、異質の競技をすべてこなす能力や鍛錬には感嘆するが、残念ながら百米の有名選手の名をあげることはできても、大方の人は10種競技の世界チャンピオンや五輪の金メダリストの名をあげることはできない。私個人は、10種競技のチャンピオンこそ、人間の能力を開花させた最高のチャンピオンだと考えるが、世の中の評価はこうっていない。

複数の世界を同時に追求することが難しいから、二兎を追うのは時間的に異なる期間に分かれてしまう。「もっと若い時に始めれば良かった」と思っても、その時には別の大切な世界があったのだからできなかつた。池田も40歳の転機を迎えて、もう一度、人生の目標を見直したという。何をしたいのか。何かやり残してはいないのか。その想いが重なって、声楽を学び始めた。

今、池田は各種のコンサートで歌いながら、オペラに出演し、演劇舞台にも立つ。自らの主体の実現を限りなく追及している。団塊世代で私と同年だからハングリー精神があることは分かるが、それだけでなく自己を実現するという強い欲求が池田の行動を支えている。ひとつの道を極めた者は、また別の道を歩み、極めることもできる。もちろん、最大限の能力を発揮できたはずの失われた時間は取り戻しようがないから、極める頂上に絶対的な限界があるという厳然とした現実には存在するのだが。

プロとアマの境界

並はずれた才能があっても、人は歳には勝てない。あらゆる世界のトップスターも、歳とともに維持できるレベルは落ちていく。ほとんどすべての世界で、若さの力は何物にも代えられない。もちろん、歳を重ねることで経験を積み、老練になることはあるが、それは失われた力を補充するものでしかない。

他方、若い時にその世界の修練を積む機会がなく、歳を取ってから修練を積んだ場合はどうだろう。池田のように50歳近くで声楽を学び始めた場合、どこまでその世界のレベルに到達できるのだろうか。もちろん、池田にはソプラノの世界でトップを極めようという考えはない。音楽に限らず、歳を取ってから飛び込んだ世界での目標は、自ずと若い時に飛び込んだ時の目標とは異なるだろう。誰かと競争してその上に立とうという野心はない。それは50歳を過ぎてから長距離レースに参加し始めたケースにも言えること。しかし、ただ歌っていれば満足できる訳ではない。長距離レースでも皆それぞれに目標があるだろう。ただ、走れば良い

というものではない。その目標は、しかし、自らに課した目標であって、他者との競争ではない。

池田の目標はコンサートの舞台に立てるレベルを獲得し、それを維持するために精進するということだ。遅れてその世界に参入した者には多くのハンディがある。しかし、その世界のトップに立っていた人のレベルも落ちていく。トッププロが力を落としていくレベルと、アマチュアが精進を重ねて上げていったレベル(セミプロ)が、どこかで交差することがある。スポーツであれ音楽であれ、世界のトップとアマチュアの差は明瞭だが、トップから次第にレベルが下がってくると、プロとセミプロとの差が限りなく縮まってくる。サッカーの日本代表が練習相手の流通経済大学相手に苦戦したり、調子を落とした高橋尚子がアマチュア並みのタイムになったりする。J1のチームが、草サッカーチームに負けることもある。このように、プロとアマ、トッププロと並のプロ・トップアマチュアとの差が限りなく縮まり、紙一重になることがある。

「寄る年並みには勝てない」というが、精進を積み、それなりのレベルに達することができることを、池田は身をもって教えてくれる。生きている限り、生きる証を限りなく求めたい。生きている意味を探り、それを確かめることが、池田にとって歌う意味なのだ。

瞬間芸としてのライブ

コバケンの魅力はライブにある。それも合唱が付けば、魅力は倍増する。コバケンの歌唱指導には定評がある。まだ指揮者として芽が出ない時代に、小林はアマチュアの合唱団を振り続けた。自らもピアノで歌ったりもする。だから、合唱団や歌手には厳しい。発声だけでなく、詞の意味や発音、荘厳さや繊細さのヴァリエーションに徹底的な注文をつける。さらには、舞台での立ち振る舞いも指示する。オーケストラの指揮者で、合唱団の起立のスタイルまで指示を出す人は稀だろう。「レクイエム」でも、静かに立ち上がる指示と、サーと立ち上がる指示を出していた。ライブでは音だけでなく、合唱団

や歌手の立ち振る舞いも、舞台を構成する要素になる。だから、視覚的な映像も重要な要素なのである。

そういう視覚的な要素に気を配るのは邪道だと言う人もいる。事実、小林のダイナミックな指揮振りが聴衆に受けるのを好ましくないと考えている音楽家もいる。音楽そのものではなく、指揮振りが強烈な印象を与えて、奏でられる演奏の質を判断できなくするという。しかし、ライブはまさにオケと聴衆が一体感を得るところに価値があるのだから、目に見える映像を抜きにしてはその価値を語るができない。

もし純粋な音だけを求めるのであれば、レコーディングになる。一音ごとに切り貼りして、間違いのない音の列が制作されていく。これも一つの音楽には違いないが、化粧して素顔が分からなくなった美人のようなものだ。以前、ライブとレコーディングを、学者の講義と書物に喩えたことがある。大学者ほど話が下手で、聴くに耐えない人は多い。逆に、書物の業績はなくても、聴衆を説得し、感嘆させる話者がいる。人に感動を与えるのはどちらだろうか。

シュテファン大聖堂は聴衆で埋まった。自分でチケットを買い、入場してきた人々だ。観光客に開放されていたゲネプロとは違い、本番は自腹を切った聴衆だけが席を占めた。夏の観光シーズンが始まっているから、いろいろな国の人々がいたに違いない。これだけの聴衆が入りながら、空っぽのドームかと錯覚するほどにノイズがない。まさに「水をうったような静けさ」とはこのようなものかと思った。モーツァルトの鎮魂か、それとも親しい人の鎮魂に、祈りを捧げたのだろうか。最後まで静寂に包まれて「レクイエム」が演奏された。小林が奏でる「レクイエム」は、繊細で美しく、そして思いがこもっている。最後の一音が完全に消えるまで聴衆は待っていた。そして総立ちになり、万雷の拍手で演奏者を讃えた。数十名の聴衆が舞台に駆け寄り、カメラのフラッシュを焚き、指揮者とソリストが退場できないほどの人だかりになった。再び指揮台上がった小林はドイツ語で短く挨拶し、モーツァルトの鎮魂の曲になった第8曲「ラクリモサ」(涙の日)を再演奏して応えた。聴衆の中には十字架を切り、涙する人もいた。合唱団にも、鎮魂の事情を抱えてレクイエムを歌った人がいた。

この夜は実に不思議な感覚に見舞われた。日本人指揮者が、日本とハンガリーの歌手、日本とハンガリーの合唱団、そしてハンガリーのオーケストラを率いて、モーツァルトが眠るシュテファン教会で、ウィーンの人々と世界の各地からウィーンを訪れた人々を一つの共感の世界に招いた。これこそライブの魅力である。

自分への投資

一つの海外コンサートを実現するのに、気の遠くなるような準備が必要だ。会場、ソリストやオーケストラを確保し、コンサートにこぎつけるまで、実に細かな調整や交渉が必要になる。この世界には多くの代理人や仲介業者が存在する。彼らに一切の取り仕切りを任せれば楽だが、その代わりに原価の50%、100%のマージンを乗せられても文句は言えない。

シュテファン大聖堂の借料として最初に提示されたのは実に3万ユーロである。オーケストラを大聖堂のコンサート主催会社に繋いだハンガリーの仲介業者が5割のマージンを上乗せした結果だ。日本のオケや合唱団がこぞってウィーンの楽友協会、コンチェルトハウス、シュテファン大聖堂などで演奏しようとするから、間に入る業者は日本人相手にひと儲けしようと企んでいる。だから、ウィーンでは日本人相手の料金が設定される。仲介業者から法外な料金を提示されても、独自の交渉ルートがないから、文句なしに支払ってしまう。日本人は実に金払いが良い。こうして、ウィーンの主要会場の借料は、3万~3.5万ユーロの相場に高止まりしている。一晩の演奏会場としてはべら棒な料金である。

今回は粘り強い交渉で、最終的にハンガリーの仲介業者を外すことで料金の決着を見たが、その代わり、以後は会場借り受けにかかわる細かなやり取りを直に行うことになった。合唱団やオケの配置、特設スタンドの設置の有無、限りのある控室の利用、ソリストの控え室の確保、プログラム原稿、教会への入場の仕方、チケット販売など、細かな事務処理が発生する。会場費を払えば終りなのではない。

わずか1時間のコンサートを実現するために、長い時間をかけて多くの人とお金を動かし、まとめ上げなければならぬ。これだけの時間と労力をかけて創り上げるライ

ブ・コンサートは一瞬のうちに終わってしまう。もちろん、ビデオやDVDに収めることはできるが、コンサート自体はほとんど瞬間のうち消えていく。しかし、すべてが空気の中に消えるわけではない。演奏した人々や聴衆には、肌で感じた感動や印象や想いが、記憶の中に収められていく。実に贅沢な時間だとも言える。形に残らないもののために、自分の記憶の中に留めるために、チケットを買い、ツアーに参加する。無形のものに投資するのは、ある意味で一番贅沢で何物にも代え難いお金の使い方とも言える。

人は物的な財産をあの世に持っていくことはできない。たくさんの思い出や記憶を抱えて旅立つ。その旅立ちに至るまで、反芻するように、楽しい思い出や感動の瞬間を何度も記憶に呼び起こし、生きている喜びを噛みしめる。自らの思い出のために投資する。お金の額では計り知れない価値がある。

エピソード

ゲネプロから戻った小林が口を開いた。「今日、とっても不愉快なことがあったのです」と。「教会に入る時に、日本人観光客が、”あっ、小沢征爾だ”と言うのです。失礼しちゃいますよね」。飛行機の中でも、空港でも、小沢と間違えられることが度々だという。この話になると、小林は笑い話のネタを繰り出してくる。最近では、私は「深い関心がなければ、良く似た人物を区別することができないのですよ。女優か、指揮者かは区別できますが。私などは、松たか子と松嶋菜々子の区別ができません。さすがに、米倉涼子と仲間由紀恵は区別できます」と合意の手を入れている。

コンサートが終わり、ホテル・ザッハー前からタクシーに乗った。降り際に運ちゃんが、「俺は小沢を乗せて何て運が良いのだろう。サインが欲しい」という。小沢ではないと言っても、先方は引かない。「隠したって俺には分かっている。でも、そんなことはどうでも良いからサインをくれ」というので、チップを渡して引き下がってもらった。ウィーンの日本人指揮者と言えば小沢だから仕方がない。小沢がブダペストに行ったら小林になるに違いない。

チコーシュ・ナジ・ベーラの思い出 佐藤 経明

今でもわが国では「東欧」と言うと、十把一絡げに捉える向きが後を絶たないから、1960年代半ばの状況は想像に余りがある。だが、旅行者の目に映る「不足経済現象」(コルナイ)にしても、「市民社会」のあり方にしても、同じ「社会主義」でも少なからぬ違いがあった。

食料品や一般消費財の「不足」は、モスクワからワルシャワに行くに「おや、少し良いな」、プラハに着くと「相当に良いな」という感じがし、ブダペストに来ると、当時ですら「ずっと良いな」という印象を受けたものである。

ワルシャワで最初、私が会った通信社PAPの編集局長はのっけから「世界最初の社会主義が後進ロンで生まれたことから、われわれの不幸はなべて始まる」と言ったが、これは後に80年代、フランス社会党の「自主管理社会主義」論者(ジャック・アタリはその代表格だった)がユーゴスラヴィア自主管理について語る時の語調と似ていた。

しかし、ワルシャワでは会ったばかりの経済学者が私の前で電話をかけ「いま、日本の佐藤という経済学者が来ているが、会ってやってくれるか」と経済官庁の友人のアポイントメントを取ってくれるなどは、モスクワでは想像も出来ないことだった。プラハでは少し堅苦しかったが、対応はきわめてソフトだった。

その後「別格」のチコーシュ・ナジが待ち構えていたのだった。「チコーシュ」は英語では「horse-man」つまり「馬匹業者」、「ナジ」は「big」だから、「大馬匹業者」となる。当時、私が聞いたところでは、1915年セグドの名家に生まれ、同地の大学を卒業、ドイツに留学、帰国後は大蔵官僚の道を行んだと言う。戦争終結直後、逮捕拘留されたが、亡命先から帰国した「ボルシェビキ」のなかに戦後経済再建には良きテクノクラートの協力が要ることを理解していた「開明派」がいて、拘置所を訪れ「われわれに協力してくれたらここから出してやる」と持ちかけたことから、彼の『戦後』が始まったと言う。

当時、企画庁でも2人の副長官のうち、一人は政治任命、一人はテクノクラートという慣行だったから、こうした経歴を背後に持つチコーシュ・ナジが、後にアカデミー会員、ハンガリー経済学会会長にはなっても、政府

ではドイツ語でいう“Staatssekretär”(「事務次官」相当)のランクにとどまったのは分かるような気がする。

ホテル・ロイヤルでの議論は深更に及んだが、議論の中心は価格問題だった。当時、立案をほぼ終わっていた「新経済メカニズム」の核心は、行政的資材配分の廃止、細かい義務的指標の企業下達廃止と並んで、「混合価格システム」の採用にあったからである。要するに基礎的生産財、工業完成品、消費財・サービスのそれぞれにつき固定価格・限界価格・自由価格の範囲をそれぞれ決める、ということだった。何となく「三種混合ワクチン」を思わせたが、自由価格の予定範囲は、案外と工業完成品で大きかった。改革実施は1967-68年に予定されていたが、実施の5年後にはトータルで見た「自由価格」のシェアを50パーセントくらいにしたい、というのがチコーシュ・ナジの期待だった。「楽観的に過ぎはしないか」というのが私の見方だったが、それと並んで疑問を感じたのは「限界価格」の作動の仕方だった。価格の「天井」と「床」を指定してその範囲内で当事者に交渉させるといことだが、そんなにうまく行くか疑問だった。果たして供給者側の立場が強い『不足経済』のもとでは「天井」に張り付いたのだが、それは後日の物語である。ともかく当時は価格を「柔軟」にすることにバラ色の期待がかけられた、ある意味では幸せな時代だった。私も当時はヒトラー型のチョビ髭を生やしていたチコーシュ・ナジの価格改革の成功を希望して別れたのだった。価格を動かすだけではどうにもならないことが分かった頃には、ナジ氏のヒゲは消えていたが、動乱の後始末は手荒いやり方でつけたカーダールが「われわれに反対しないものはわれわれの味方だ」とスターリン主義のスローガン「われわれに同調しないものはわれわれの敵だ」を逆転させてから2年、街の裏通りにはまだ弾痕が沢山残っていたが、社会がようやく「息つき」を始めた頃のことである。

ハンガリー動乱のことは話さなかったが、アメリカに亡命した経済学者ベアラ・バラッサのことを「惜しい男で、残っていて欲しかったのだが」というナジの口調に亡命者に対する偏見は感じられなかった。体制転換後の1995年には、彼と知り合って30年を二人

特別寄稿

で祝うことになる。ナジ老夫人は独仏が達者で、レセプションで「何を召し上がるの」と近づいて来て面倒を見てくれる時には、どこか昔の良家の女学生のような雰囲気があった、心を和ませてくれた。チコーシュ・ナジは2007年11月、92歳で亡くなったが、90歳近い晩年に若い女性と再婚したと聞いて、私はびっくり仰天することになる。だが、私が1965年2月、ブダペストで原作ガルシア・ロルカのオペラ「血の婚礼」を観た時、二列後ろの座席にいた82歳のコダエイ(2年後に死去)は28歳の夫人を同伴していたから、格別、驚くことはないのかもしれない。



右端がチコーシュ、真ん中の女性がマリー・ラヴィーニユ、その向こうでカメラを持っているのが著者

経済研究所で会ったアウシュ・シャンドルはコメコンに永く出向していた専門家で、私が彼に負うものはきわめて大きい。コメコン経済協力の「建前」を完全に引っ剥がして、協力メカニズムの実態が、ソ連型計画経済の「背骨」である、行政的資材配分方式を国際的に「投影」したものに他ならないことを教えてくれたからである。「これがある限り、いくら市場的要素の拡大を意図してもどうにもならない」というのが、彼の結論だった。1964年には国際経済協力銀行(通称・コメコン銀行)が出来て「振替ルーブル」が導入されたので、わが国でもこれに期待をかける向きがあったが、ハンガリーの専門家はもう完全に醒めていた。「ソ連自体が巨大な統合体で、これ以上の『統合』は必要としない」というのが、彼らの皮肉な言い方だった。アウシュは70年代に入る頃、自殺したが、それが長年の糖尿病によるものだったか、彼自身の悲観主義によるものだったか、判然としない。しかし、眼に涙を浮かべて彼の自殺を教えてくれたのは、彼の「論敵」だったソ連のオレク・ボゴモロフだった。私の脳裏には、いろんな人の顔が走馬灯のように行き交うのである。



収穫の喜び 収穫の喜び—ジャム、ジュースづくり

小松 裕文

9月の声を聞くとやはり「秋」を感じる今日この頃である。

秋の一日、妻の友人と共にブドウの果汁絞りを楽しんだ。

名前は分からないが、我が家には一本の大きなブドウの樹がある。多分野生のブドウではないかというのが周りの意見だが一実は小さくて食用には適さないが、甘さは



十分、例年驚くほど沢山の実をつける。絞って、ブドウジュースにするかそれを発酵させてワインにしてきた。

ブドウを摘み、ブドウの実を花梗(かこう、実を付けている枝)から一粒ずつ外す。それを手で押しつぶして絞り機にかけ果汁を絞る。

そのまま飲むのがハンガリー語ではムシユト=must。一日位置くと発酵が始まるが半分くらい発酵したのがマルチ=murciシユトラム。さらに発酵を進めて空気を断てばワインの出来上がり。

ゲストが摘み取ったブドウは全部のブドウの三分の二。これから搾ったジュースは15リットルだった。真紅で甘美な自然の恵みに感謝、感謝。

我が家の果物イベントは例年5月下旬に始まる。

チェレスニエ(甘いサクランボ)が食べごろになるからだ。今年も5月24日に、しーちゃんとそのママ、しーちゃんの友達のエミちゃん

と、トーマ君とそのママが最初のゲストとして来宅、サクランボ摘みを一緒に楽しんだ。子供たちは初めての経験らしく、ルピー色の実を食べご機嫌。サクランボに飽きると木登りのほうが気に入りなかなか木から下りようとしなかった。

サクランボは最早完熟していて、一時も早く収穫しなくてはならなかった。友人、知

る。仕事となると忍耐と体力がいる作業だろう。

10-20Kgのメッジを採ると、次の作業は種取り。一粒ずつ丁寧に根気よく種を取ってゆく。種取り器はメイド イン ハンガリーもあるが性能はもうひとつ。我が家のはスイスで見つけた使い易い器だ。ここまでの作業は男性の仕事。

種取のすんだメッジは取り残しの種のチェックも兼ねて、半分くらい押しつぶし、余分な果汁を搾り取る。そうすることによって果汁を固めるゼラチンなどの凝固材を使わずにすむ。中身の濃いジャムが出来る訳だ。搾り取った果汁は加熱すれば100%のジュース、そのままビンに保存しておけば、サクランボ酒になる。

以上の作業は準備作業。最後は煮詰めの作業。メッジの重さの3分の1の砂糖を加え、煮詰めていく。凡そ3Kgのメッジに900グラムから1Kgの砂糖を使うのがわが家のジャム。甘さを抑え、メッジ本来の酸っぱさや風味を残すためだ。このとき大切なのはアク取り。丁寧に根気よくアクを取り続ける。煮詰める時間は約30分。沸騰したメッジの実からアクを取る作業は熱くて大変なもの。

煮詰めたメッジは熱いうちにビンに詰める。ふたを下にして、毛布で保温しながら冷めるのを待つ。こうすることによって余分な空気抜きにもなるようだ。保存剤なしに1-2年は保つ。

最後の作業はラベル張り。ラベルは妻が手書きで作ったもの。パソコンで作らずに手書きのラベルを使うのは、最初から最後まで手作りのジャムにこだわる所以である。今年作業6月21日に開始して、7月7日まで。作ったジャムは400-500gのビンが約150本、それより大きなビンが50本だった。お疲れ様でした。

メッジがすむと次の果物はブラックベリー、リングロー(スモモの一種)シルバ(プラム)と収穫期を迎えるのだが、今年は旅行期間と重なって大半を腐らせてしまった。

残る果物はリンゴ。10月中旬には真っ赤危険と隣り合わせの作業で一番骨が折れ

ハンガリー30年、物理学一筋【その1】

板井 一政

本日ブダペストは大雪となっております」と機内放送が流れ、着陸を前にした乗客がざわつき始めました。東京生まれ東京育ちで大雪の何たるかを知らない私には、傘はどこに入れたかな、などの呑気なことしか頭に浮かんできません。そもそもそのときの私にとっては、暖冬だろうが厳冬だろうが、どうでもいいことだったので。下宿生活さえしたことの無い人間が、一年半という長期間の予定で外国生活に飛び込むというのですら、頭と心のなかを巡っている問題は別の次元にありました。後から聞いたところですが、その年(1980年)、ハンガリーには冬が早く来て、私が到着した12月18日以前にも既に何度か大雪があったそうです。ともあれ、その大雪の日に私の当地での生活が始まりました。しかし話はもう少しさかのぼったところから始めさせていただきます。

その年の初夏、大学院生の仲間達と雑談をしているとき、ある一人が、ハンガリー政府奨学生の募集案内が掲示板に張ってある、と軽く口にしました。雑談中に急にシーンとしたとき、場をしらけさせないための口であって、「新しいラーメン屋を見つけた」でも「あそこに猫がいる」でも良かったわけですが、ちょうど頭に浮かんだものが掲示板だったというだけのことです。その時それがラーメン屋か猫であったら、私の人生は全く別のものとなっていたでしょう。いくつかある掲示板のなかでも私が見ることは決してなかった場所に張ってあったので、彼が言わなかったら、まず気が付かなかったでしょうから。

実はそのころ、所属していた研究室で少し居辛い思いを感じていました。所属先の変更も考えていたほどでした。というのも、専門的にも人間的にも波長の合う先輩たちが長期海外出張に出てしまっていたのです。ですから、奨学生募集の話に「彼らが帰って来るまで外国に逃げるのも悪くない」という考えが浮かんだのも不思議ではありません。そのうえ、ある著名な教授に聞いてみると、「ハンガリーは低次元のメッカですね」とおっしゃるのです。

この言葉は正常な日本語に訳しますと「ハンガリーは低次元系の性質を示す物質の物理学研究のメッカですね」となります。低次元系の性質と言うのは、例えば電気を伝導する性質が、日常的な(鉄や銅などの)金属のように縦横上下どんな方向にも「三次元的に」電気を伝える、というのではなくて、ある方向に沿ってだけ(一次的に)、もしくは、ある面に沿ってだけ(二次元的に)伝導する、ということです。低次元系の物理を研究している世

界的な大先生も隣のおばちゃんによると、低次元な事を研究している暇人、となるのが常です。

そのようなわけで、メッカなら行っても良いじゃないか、と思うようになったわけです。願書提出、面接と言ったプロセスを7月に済ませました。しかし、その後何の連絡もありません。秋の学会も終わったころには、ハンガリーの事などすっかり忘れてしまいました。そんなところへ(もう11月でした)突然大使館から奨学金獲得の手紙が届いたのです。

困った事です。その時には既に所属研究室変更の希望も出し、具体化しつつあるところで、状況は夏の時点より複雑です。それでも「今となっては問題外」と即座に棄却しなかったのは、やはり「ハンガリーは低次元のメッカ」という著名教授の言葉が頭に残っていたからでしょう。色々な人と相談したすえ、結局「メッカ」行きを選択しました。

大雪の日から始まった当地滞在も既に29年目となります。一年半の予定に比べると少々長くなりました。その間、社会は大きく変化しましたが、自然もかなり変わったようで、今では大雪などかなり稀になってしまいました。残念に思います。雪にこだわっているようですが、理由あつてのことです。両親が北海道出身で、子供の頃によ

く雪にまつわる楽しい思い出話をさんざん聞かされたものの、冬に北海道へ連れていってくれたことがなく、雪への憧れが満たさぬ欲求として意識下に潜んでいたようです。当地での初日に大雪景色に囲まれている自分を実感したとたんに胸の底から湧き出てきた幸福感は、今でも鮮明に覚えています。

なぜここに居座ってしまったか、と云う質問をよく受けます。私の方から見ると、これが最も自然な道だったので、答えるのが少々難しいです。私の当地での研究生生活はハンガリー科学アカデミーの物理学研究所にて始まりましたが、それ以来、同じ部屋で同じ机に座っております。当時の同僚たちのほとんどは、年代がシフトしただけで、今でも同僚です。小国であるための必然性か、この国の研究者達はお互いを家族のように助け合います。特に当時はそれが大変強かったです。私もそういう扱いを受けました。これはハンガリー人の民族性でもあるようですが、本当に有り難いことでした(現在、この相互援助の精神は残念ながら少々弱まっているようにも感じられます)。



留学生自己紹介

リスト音楽院大学院合格
リスト音楽院大学院 ピアノ科
菊地 玲子

私、踊る！
ハンガリー国立バレエ学校
古曾志 飛鳥

目標に向かって
犀川 裕紀

ハンガリーに来て、早3年目を迎えています。2009年9月からマスターコースのピアノ科に在籍することになりました。これまでの2年間は、パートタイム生として週1度の貴重なレッスンの他に、チェロやクラリネットの伴奏、ハンガリー春の音楽祭「日本の日」に20絃筆奏者とコラボ出演や、日本語を学ぶハンガリー人のお友達との交流など、色々な経験をしました。とくに日本人の子供達にピアノを教える仕事をさせて貰った2年間は、逆に自分自身が教わる事が多かったですし、自分の音楽を改めて見つめ直す大切な時間でもありました。その他にはオペラやコンサートに足を運び、特にハンガリーのオペレッタ・ミュージカルにはとても魅力を感じ、今も良く通っています。異国での一人生活は、言語をはじめ文化や人種の違いなど、時には辛いことももちろんあります。

生活面ではハンガリー語が以前より話せる様になり、例えばレストランでちょっとしたたわいもないやり取りを出来る様になったり、お買い物の時はハンガリー語だけを使ってみたり、隣人のおばあさん達との会話を楽しんだり、心が温くなる瞬間が増えた様に思います。ようやく海外生活にも慣れ、心にもゆとりが出来、このヨーロッパの街並み、空気や時間の流れ・・・日本では感じる事の出来ないこの空間を、毎日肌で感じながら周りを見渡す事が出来る様になった気がします。それと同時に、日本という国や日本人としての自分というものをとても強く感じる日々でもあります。音楽観にしても、価値観にしても、食生活にしても、日本を飛び出して初めて知った出来事も沢山ありました。

これから先、より沢山の音楽に触れられる事や、沢山の人の出会いなど、音楽が結び付けてくれる出来事を大切にしたいと思っています。そしていつの日か日本へ戻り、私の原点である札幌の音楽発展の為に、微力ながらも貢献する事が出来たら、と思っています。決して一人だけの力では開けなかったこの道を、こうして今歩んでいられることに感謝しています。



「やったあ〜!!」私にとても最高の出来事が起こりました。

去年の6月頃、念願のバレエ留学が9月からハンガリーで出来るというオーディションの合格の知らせが届きました。何度もバレエ学校のオーディションに落ちこちてきた私にとってこの知らせはどんな出来事よりも最高の出来事でした。私の夢は、外国のバレエ学校でダンスをたくさん学び、踊り、そして外国のバレエ団に入団すること。9月、留学に旅立つ前、私は不安や緊張よりもドキドキ、ワクワクが胸がいっぱいでした。そのお陰か、家族や友達と離れることが悲しく感じませんでした。だけど、実際に留学してみると理想とは少し違って、言葉の壁・日本の家族や友達と離れて生活する寂しさ、食事の内容に体重の管理、など色々な悩みを持ちました。「もう帰りたい・・・」って何度も思いました。でもそんな時、心の支えになってくれたのが私のお母さん。「帰ってきたかったらいつでも帰ってくればいい。」心に大きな余裕ができました。

それからあつという間に1年が過ぎ、夏休みを楽しく日本で過ごし、心をリフレッシュして、今私はまたハンガリーで踊っています。2年目になると気付くことや出来るようになった事がいっぱいあります。1年目では分らなかった学校の掲示板の内容、日本とハンガリーの雰囲気の違い、人とのコミュニケーションのとり方、自分の今すべきこと、自分の頭の中でハンガリーのイメージが明確に見えてきました。言葉も少しずつ出来るようになって、レッスン中の先生から受ける注意、友達ともあまり話せなかったのに、今年に入って打ち解けることができたような気がします。今ではクラスの合間に一緒に笑うことが増えました。

学校ではバレエだけではなく、男の子と組んで踊るパドドゥクラス・モダンバレエにサルサ!そしてキャラクターダンス。選ばれりと学校公演にでるチャンスもあります。こんなにたくさんのダンスを踊らせてくれているバレエ学校にとても感謝しています。

好きなことを思う存分にやれる今は私にとって、とても貴重な時期。この貴重な時期をハンガリーで過ごせることになんとも感動してしまいます。ハンガリーで学んだ色々な事が役立てられる事ができたらその時わたしはまたおきな感動と踊ることのできる幸せを胸一杯に抱くことができるでしょう。その日に向かってLet's Dance!!

私は今年9月に来たばかりで、現在バラッシャ・バーリント語学学校に語学留学しています。中学より音楽を始め、大学4年間音楽を続けてきましたが、その中で常に「合唱」に興味があり、合唱、合唱指揮を勉強したいと思い続けていました。ここハンガリーに留学を決めたのは去年の10月頃。ハンガリーに実際に留学していた方より、ハンガリーは合唱のとても盛んな国で、合唱の勉強を本格的にできる場所があると教えていただいたのがきっかけで、音大にフルタイムで入学し、本格的に勉強するにはまず、語学が出来なければならない。なんとなくの英語程度しかできない自分にとって、短期でのハンガリー語習得は必然でした。その後様々な伝手を頼り、今年7月に下見でハンガリーに来ましたが、初めての海外旅行でとても興奮していたのは今でも覚えています。日本とは全く違う文化、町並み、人間、全てが全く新鮮で、すぐにハンガリーが好きになりました。

BBIには週5日、1日3〜4時間の授業があります。授業で使われる言葉は、よっぽど誰も理解できない時を除き、ハンガリー語のみ。クラスには、日本人は私のみです。初日は、はっきり言って不安でした。授業が理解できるのか。周りの学生とコミュニケーションがとれるのか。しかしその不安はすぐになくなります。周りの学生も皆ハンガリー語が出来ないのと同じで、しかもなんとなくの英語。私と同じです。授業も、文法をただ説明し、内容を覚えるだけの授業ではなく、会話中心の授業。全員が参加し、ジェスチャーなどでハンガリー語からそのまま単語を理解する内容で、それはハンガリー語が全く分からない学生をこの上なく考慮した内容でした。学校からは授業進行に使う1冊の教科書が配られるのですが、その内容もとても面白く、充実しています。また、周りには日本人に興味津々で、様々な国の学生と異文化交流でき、すぐに友達ができました。

これから、まだこの国について全く分からない自分が、様々な事を経験する事になると思いますが、挑戦の気持ちを忘れずに頑張ろうと思います。ハンガリーには本当に素晴らしい演奏をする合唱団が多く、近々どこか合唱団に入団出来ればと考えており、また後期からはパートタイムで音大に入学したいとも考えています。

私たち家族がハンガリーに来たのは3年前の冬、その時長女の夏末は3歳、次女春子はまだ生まれていなかった。夏末は日本の幼稚園で1・2学期を過ごした後だった。日本では幼稚園大好き、1度も行くのが嫌でない事なんてなかった。「ハンガリーで幼稚園どうする?」。日本の幼稚園もあるみたいだけれど(ほどなく閉園になったが)、せっかくの海外生活だし・・・「現地校?」でも親がハンガリー語わからない・・・「ではインターナショナル!」というわけで、娘はインターナショナルの幼稚園に行くことになった。空きのある幼稚園が見つかるまでに少々時間がかかり、その間は家で過ごしていたので、幼稚園に行くことを娘は(親も)とても楽しみにしていた。しかし、言葉の壁は薄くはなかったようだった。

夏末の性格はオープンなほうだが、やはり先生の英語で言うことはわからない、しかもインターナショナルとはいえ、通う子の95%はハンガリー人で、子供同士はハンガリー語をしゃべっている。

最初は苦痛だったのだろう、幼稚園に行くことは嫌がらないが、送り届けて私が帰ろうとすると泣くようになった。そんな切ない日々が3ヶ月ほど続いたが、先生方のおかげと、また本人もそれなりに努力をしたのだろう、笑い顔も増えて、幼稚園が大好きになっていった。そして英語はもちろんのこと、2年もたつと、いつのまにか、ハンガリー語も話すように。でも気がつくと、日本語がちょっと、アヤシイ・・・。考えてみれば日本では4月から小学生。こちらではまだ幼稚園に行っているのでのんびりしていたのだが。このままでは娘は「ルー大柴」みたいになってしまう。面白いけど、自分の娘ではそれは絶対にだめ。ではどうしよう。そうだ、補習校だ、ブダペストには補習校があるではないか。でも親にも、葛藤はあった。毎週土曜日学校じゃ、週末旅行に行けないし・・・いや、ここはそんなことを行っている場合ではない。そして娘は、入学式直前にもかかわらず親切に受け入れてくれたみどりの丘補習校に通うことになった。

入学式。一年生は7人だ。学校というものがよくわかっていない夏末も、お友達と日本語が話せると、嬉しいのか、それだけで、もう興奮状態(日本語で、話せる、は後でちょっと違うかも、という場面に遭遇することになります)。初日は勉強も余りしないから、走り回っている。こうして毎週土曜、週一回の補習校が始まった。補習校では国語(日本語)を中心とした授業が行われる。娘は一年生だから、まずはひらがなから。担任の先生は遊びの要素を取り入れながら楽しく教えてくださった様だ。翌日には先生が授業の内容をメールして下さるので、親も一緒に楽しんだ。少し経つと、生徒や親御さんの顔も浮かんでくるので、先生のレポートはさながら実況中継のようだ。時には注意事項もあり、ドキッとさせられることもあったが。宿題も毎回出される。娘の幼稚園は夕方まで預かってくれていたので、家で時間はそうは多く

ないのだが、宿題やらないの?という嫌とは言わず、頑張っていた。きっと皆がちゃんとやってくるので、恥ずかしい思いをしたくないのだろう。毎日の晩御飯のおかずの名前を書いてくる、という宿題には、同じメニューが重ならないようにとか、缶詰をあけてチンしただけのものでは恥ずかしいとか、親のほうが緊張してしまう場面もあった。こういった子供にとって、楽しい宿題のおかげで、宿題以外でも自分から絵本を読んだり、TVのテロップを口に出して言うてみたり、文字にとっても興味を持つように上手に導いてくれたようだった。

授業が終わった後が彼女らの本当のお楽しみの時間のようだった。すぐにお昼ご飯の時間ではあるが、毎回すぐ帰れたためにはない。必ずひとしきり皆で遊んでから出ないとなかなか帰れない。毎回眺めているとわかってきた。それぞれの子供の得意な言語が違うのだ。でも皆慣れてくると、相手によって使用言語を使い分けている感じだ。これはほんとうにすごいことだ。つまり皆少なくともバイリンガル、またはトライリンガルなのだ。夏末にとっての補習校での最大のイベントは、宿泊学習だったであろう。これは先生方と生徒だけの、親なしで宿泊施設に泊まるというもの。夏末にとって、母親なしでどこかに泊まるというのはハンガリーに来てからは初体験。夜中に泣いて先生が扱いかねて、電話が来るのではないかと、とてもとても心配したが、こちらの心配をよそに、本人はこれもまた、ずいぶん楽しんだようであった。もともと、子供たちだけでもうまくいくように、上級生のお姉さんが入るように先生方が十分配慮の行き届いた班分けをしてくださったおかげであろう。

皆でカレーライスを作ったり、最終日に公開する劇の練習をしたりしたそう。泊まりは一泊で、次の日迎えに行くと、皆で練習したという日本語の劇、「ねずみの嫁入り」を見せてくれた。日本の学芸会のように、私たちも楽しませてもらった。先に書いたように、得意言語が異なる子供たちの劇であるから、すらすら言えない子もいるけれども、みな一生懸命だ。でもきつと得意言語が違うということを知っているのだから、そんなことは気にならないのだろう。自分が不得意言語の中にいるときのつらさを知っている子達だから。こういう風に立場や環境の違いが出てくるものに影響を与えるということを理解している同世代の日本の子供たちがいったい何人いるであろうか。それを考えると、ひとつの物差しで人と人を比べる、ということを愚かだと思ふ心が自然と身についてくるであろう、すばらしい環境であるように思う。夏休みを挟んで帰国することになった。補習校という学校に通えた事で娘も、何かをつかんだと思いたい。帰国しても、いろいろな国でいろいろな立場で頑張っている子供たちがいることを忘れずにいてほしい。そしてそういう子供たちを暖かく見守って指導してくれた先生方がいたことも。

みどりの丘日本語補習校

島田 麻子

ブダペスト日本人学校

子どもたちを目標に!

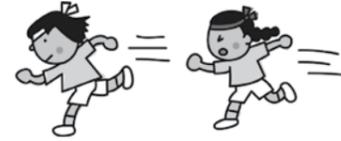
澤田 千浩

ナイキブダペストマラソンに参加して 小林 律子

7月のある日、女房からマラソン大会への参加申し込みの勧誘があった。ここ最近、特に思っていたのが在ハンガリー日本人のマラソン大会への参加率が、異様に高いことだったが、まさか、自分も参加することになるとは考えてもいなかった。高校以来のマラソン大会、事前に1度、マルギットで練習して大会に臨んだ。

当日、天気は晴れ。気温は高くもなく、低くもなく、絶好の日和。スタートラインに立ち、他のランナーとともに号砲を待った。スタートして直ぐに脚の動きが鈍くなってきた。アスファルトの硬い路面も影響したかもしれないが、やはり、たった一度の練習では、何の効果もなかったようだ。「歩きたい」「でもプライド(?)が許さない」の葛藤で、苦しみながらも、何とか歩かずに走り続け、およそ1.5キロ地点で長男をパス、その後、2キロ地点で次男の背中を見つけたが、それが最後だった。

結局、体力の差を思い知らされることになった。彼らは、これからどんどん体力を付けていくであろうし、自分は何もしなければ衰えていく一方である。これを良い機会に体力、持久力を付けてもう一度大会に参加し、子供たちよりも先にゴールラインを切る、まずは、これを目標にしたい。



家族をつなぐ一歩

西村 智美

昨年のナイキブダペストマラソンが、私達親子の初めてのレースでした。運動不足解消と子供達に体力をつけたいと参加したものの、予想以上に体力のない我が子が啞然。このままではいけないと、練習も私ばかり熱が入り、子供達の気持ちを聞く余裕はなかった。その結果、大会途中、長女は走るのがつらいと、棄権してしまう。距離が問題だったのではなく、娘達を励まし、一緒に頑張ろう!という私の気持ちが欠けていた。母親失格だ。レースの後は私の方が落ち込んだ。その後のレースから私は、最後に走るわが子の背中につくことにした。一人じゃない、一緒に頑張ろう!と。

今年のレースは、主人と5歳の娘も参加。皆で完走。それが目標。決して止まらずに、自分のペースで走り切ろうと。昨年挫折した長女は、友達と一緒に走り、私達家族の中で、最初にゴールした。全員笑顔のゴール。家族と共に一歩前進できた気持ち。次の一歩もまた娘達と一緒に頑張りたい。

9月6日(日)主人、小学校1年生・3年生の子供達と私の家族4人で健康のためにも少し運動をやろうと安易な気持ちで今回ナイキマラソンに参加しました。初めての参加です。場所は市民公園。マラソンと言っても距離はたった3.5kmと短い距離のコースです。朝市民公園に到着すると既に多くのランナーがおりゼッケンをつけ準備運動をし、スタートを今か今かと待ちわびていました。又、周りでは派手に音楽を鳴らしたりパフォーマンスがあったりテレビ局がインタビューしてたりとスタート前に盛大な盛り上がりを見せ熱気に溢れていました。私はもっとこじんまりとした大会かと思っていたので少し圧倒されました。ブダペストでこんなに多くの人々が走る事に興味があるとは全然思ってなかったので少し驚かされました。やはりどこの国でも走る事が好きな人は多いんだと思いました。

さあ時間がきたところで私達3.5kmコース組のスタートです。走り始めて大通りから英雄広場を横目に公園内へ走り込みました。ブダペストの風を切りながら周りにはまだ青々とした葉をつけた樹々がそびえ、木漏れ日の中を走り抜ける気分は本当に爽快です。しかし、半行程の距離を走ったところでじわじわと汗も多くなり息も上がってきて足も前に出なくなってきました。えっ?まだ半分しか走ってないのに?と思いつつ前半の爽快な気分とは違って後半は非常につらく長い距離に感じました。又、まだ小学校の低学年の子供達には負けなつもりでいましたが、途中で抜かれ追いつく事も出来ず結局完走はしましたが家族の中で私はびりっけつでした。日頃全く運動をしていない私にとってはたった3.5kmとはいえ結構きつものとなりました。案の定次の日からは体中の筋肉が悲鳴を上げたのは言うまでもありません。少しの距離とはいえ事前の慣らし運転が不足してたようです。次回はゴールまで爽快な気分で行きたいと思いました。

マラソンを通じて知った喜び

江森 雅美

家族4人で参加した今回のマラソン大会、同じ事にチャレンジする、我が家には今まで無い事でした。主人にとっては子供と走る初めてのマラソンです。大会の前、話すことと言えばマラソンの事。「1.2.1.2.でゆっくり走るんだよ。」「お水持って走ったほうが良いかな?」「パパ、転ばないでね。」「ママは誰と走るの?」こんな会話を朝食を取りながら良くしていました。

思い起こせば昨年の春、マラソンリレーに出場する娘の伴走で参加してから、私にとって6度目の大会。回を重ねるたびに楽しんで走る余裕が出てきました。春から秋にかけて、楽しみな行事の一つになっています。

このブダペストの素晴らしい風景の中を走ることの楽しさ、そして今回、途中で腹痛を訴えながらも完走した頑張り屋の娘の横で走れた事は、私の宝物です。子供達と一つの事を一緒に頑張る喜びを、マラソンを通じて知る事が出来ました。これからも続けて行きたいと思えます。

運動サークル情報

バドミントン部(新設)

現在、拠点となる場所を設定中です。既に4、5人の入部希望あり、コートが確保出来次第活動を開始しますので、入部希望者は運動部まとめ役:飯尾(Tel:225-3965又はe-mail:daikichi@mail.datanet.hu)までご一報ください。

その他、釣り部、ゴルフ部情報も、飯尾までお尋ねください。



テニス部情報

10月第2週よりテニス冬季シーズンが開始されます。(27週)参加ご希望の方は以下の代表者までご連絡をお願いします。

土曜チーム:経験者を中心に3時間練習・試合をしています。

場所:ヴァーロシュマヨールテニスコート

時間:毎土曜15:00~18:00

代表杉本:arpad1162@yahoo.co.jp

日曜チーム:初心者から経験者まで参加し、1面は試合、もう

1面は練習コートとしています。(2時間)

場所:マッチポイントテニスコート

時間:9:00~11:00

代表武田:takeda@eu.tdk.com

的場:h-matoba@exedy.com

二種類の申込書

梶原 将司

「よし、次は21キロに挑戦しよう！」
そう思ったのは、昨年のナイキマラソンを走り切った時の事でした。2年前、この大会に出場する子どもたちの応援に行った時、一生懸命に走る子どもたちと、楽しそうに走っているたくさんのランナーの姿を見て、胸の中に何か熱いものがこみ上げてくるのを感じました。今まで、私の辞書には「マラソン」という言葉はありませんでした。しかし、この日をきっかけに、「マラソン」という文字が、すっかり太字で刻み込まれました。これが、昨年のナイキマラソンへの初参加へとつながりました。

今年は「21キロに挑戦しよう」と、心の中では覚悟を決めていました。後は、計画・実行あるのみでした。しかし、仕事の忙しさに託けて、練習のスタートが遅くなってしまいました。気持ちはあるものの、体がついてきません。まずは、1キロから。次に2キロへ。筋肉痛になったところで体を少し休め、次に3キロへと自分なりの調整に入りました。教育現場は、おもう以上に体力勝負のところがあります。自分のためにも、子どもたちのためにも、踏ん張れる体をつくらなくてはと、自分を奮起させながらの挑戦が続きました。しかし、思うように調整が進まない中、申し込み締切日が近づいてきました。私の机の上には、二枚の申込書がありました。一枚は「21キロ」、もう一枚は「3.5キロ」の申込書でした。

ある日のことです。私が「少し外を走ってくるよ」と声を

かけかけようとする、小2の娘が「私も一緒に行く！」と付いてきました。「よし、それじゃ一緒に走ろう！」と、その日は、二人で気持ちのいい汗を流すことができました。次の日、息子も一緒に走らないうらさかと思ひ、声をかけてみました。すると、意外にも「いいよ！」という返事が返ってきました。一生懸命に後をついてくる子供たちの姿は、私が忘れていたものを思い出させてくれました。

ふと思えば、仕事の忙しさに託けて、我が子と共に過ごす、共に一つの事に取り組むことがなかった父親の自分に気がつきました。その日、私のこのマラソンに対する気持ちが変わりました。「子どもたちと一緒に手をつないでゴールしたい」という思いに……。

山登りにも色々な山登りがあります。重装備をして、酸素ボンベを担いで、何年も計画して挑む山登りもあれば、お弁当を持って、周りの景色を楽しみながらゆっくり登る山登りも。私は、心のどこかでエベレストに登ることこそが、山登りだと思っていたのかもしれませんが、ここハンガリーに来て、色々な経験をし、色々な方に出会う中で、私は人生の送り方の大切なヒントを頂いたような気がしています。また、このヒントは、これからの教師生活にも、十分生かしていけるものではないかと思っています。

両手に、汗をかいた小さい手を握りしめ、走り抜けたあのゴールラインは、私の新たな人生(親として、教師として)のスタートラインだったのかも知れないと思っています。

日本人学校運動会



赤組団長 日本人学校中学部三年
橋本 直樹

運動会の準備が始まり、団長を決める日、僕は迷っていました。しかし、自分がするしかないだろうと思い、思い切って手を挙げてみました。少し恥ずかしいという気持ちもありましたが、勇気を持って手を挙げることができました。

でも、九月になり、運動会の練習が本格的に動き始めても、やはり自分は取り残されていました。団長として何をすればいいのかわからず、周りの人に頼ることしかできませんでした。だからこそ、僕は自分にできることを探し続け、考えた末に見つけたことは「やる気を見せる」ということでした。僕も、正直言うと、みんなが思っているように、練習はめんどくさくて、やりたくなくて、恥ずかしいという考えを持っていました。けれどぼくはそういう気持ちを出さないようにしました。練習が終わったあとの休み時間には、あまり人がいないところで「疲れたー！」と思いきり叫ぶこともありましたが、でも、どんなに足や体が疲れていても、練習が始まったら、やるぞと気持ちを入れ替えました。僕が前に立ち、堂々としていればみんなもついてきてくれると信じ、行動しました。みんなは爆発的な元気をもち、練習は何度も何度もできました。

そして、運動会当日、みんなはあの二週間を無駄にせず、観客に元気な踊りを見せつけ、本番は成功しました。僕にとってあれが成功したのは僕以外の応援リーダーのみんなのおかげだと思います。踊りや歌を夏休みに休日を削ってまで一生懸命考えてくれて、僕はみんなにとっても感謝しています。彼らのおかげで赤組の応援が成功できたようなものです。そして、運動会終盤、あの接戦の末、赤組は十二点差で負けました。僕はあの十二点が忘れられません。「大玉で勝ってれば…。短距離走で一位をとってれば…。」と心の中で悔やんでも悔やみきれませんでした。



白組団長 日本人学校中学部三年
久世 優美子

運動会の見せ場となる応援合戦の練習が始まったのは夏休みだった。午後を三日間フルに活用し、短期間に集中して土台を作り上げた。夏休みが明け、一週間、二週間と順調すぎるくらい練習は円滑に進んだ。その頃は、全体の動きを覚えて、それを教えることだけで精一杯だった。しかし、残り一週間となり、練習もまとめに入るころ「楽しむ」という言葉を聞いたのをきっかけに、自分がどんな応援にしたいかを考え始めるようになった。そのとき聞いた「楽しむ」という言葉には初めて耳にするかのような新鮮な響きがあった。心にしみる清らかな響きがあった。そんな言葉に巡り会えた。

それからは「楽しむ」というのが白組の応援のコンセプトになった。私は応援リーダーとして運動会を楽しむにはどうすればいいか深く考えた。それはもう、夢に出てくるくらいまで。しかし、どんなに頭で考えても、応援合戦の楽しみ方に明確な答えは出てこなかった。ただ、団長としてみんなにしてあげられることは、みんなを楽しませてあげることなのだと気づくことはできた。

この運動会、間違いや失敗など、やり直したいこともいろいろあったけど、小学生の応援している声や、ハイタッチしたときの手の感触などの方が強く心に焼き付いている。そんな楽しい運動会にできたのは、練習から本番まで力を合わせて一緒に盛り上がった白組の仲間、最後まで精一杯競った赤組、何ヶ月も前から私たちの知らないところで運動会を支えてくださった日本人会の方や先生方がいてくれたからだと、振り返って改めて思う。この感謝の気持ちは言葉では言い尽くせないけど、ちゃんと言葉にして伝えたい。

ありがとう。





Japan Coop Kft.: 1025 Bp, Cimbalom u. 7.
Tel.: 345-0450 Fax: 345-0008
e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu
ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/

登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。

5.0
DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネジメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kóris utca 25. II/6
Tel&Fax: +36-1-786-7846
Mobil: +36-70-3815548
e-mail: propart@chello.hu
web: http://propart.client.jp/

Propart

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての
原稿を読むことができます。http://www.danube4seasons.com
皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己
紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿
は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は
執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りくださ
い。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提
出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

ドナウの
四季